

## 女子大学生における職業意識と職業未決定状態との関連

井本 万里永\*・黒澤 良輔\*\*・星野 貴俊\*\*\*・池田 浩之\*\*\*\*

本研究では、女子大学の1年生106名を対象とし女子大学生特有の職業意識と職業未決定状態との関連を、職業意識尺度と職業未決定尺度を用いて検討した。

両尺度について因子分析を行った結果、職業意識尺度では概ね先行研究と同様の5因子が抽出されたが、職業未決定尺度では先行研究とは異なる「サポート希求因子」が抽出され、女子大学生特有の職業未決定状態のタイプがあることが示唆された。また、職業意識の各下位因子を予測変数、職業未決定の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析では、レディネス不足において積極性と基礎知識、現実逃避において明るさと積極性、優柔不断において積極性と自信が、それぞれ有意な予測力を示した。このことから、女子大学生の積極性や自信を向上させるアプローチのキャリア支援が有効であると考えられる。

キーワード：職業意識，職業未決定，キャリア支援

### 1. 問題

近年の労働の現場では、正社員、派遣社員、パート労働、契約社員、フリーターなどといったように多様な働き方が存在するようになったり、ここで挙げた非正規社員の存在が増加し続けている。時代を経たことによる変化は雇用形態だけでなく、年功序列や終身雇用という制度にもあらわれている。2019年から働き方改革という法案が施行され、この法案によって個人の生産性の重要度が上昇したことにより能力主義や成果主義などの考え方が蔓延するようになった。このような働き方の歴史的・社会的変化が関係することで、「働くこと」についての意識は、骨折りの肉体労働という古典的なイメージが薄れ、自己実現や生きがいなど仕事時間だけの概念ではなく、自分時間の意識も含まれるようになった。このことから、「働くこと」といった用語の意味合いが重層的に蓄積されて、多様なイメージを包含している（高橋，2005）

といえる。そして、「働くこと」に対する概念の変化は、大学生が就職することを肯定的に捉えて積極的な構えになるのか、否定的に捉えて消極的になるのかなどの、大学生の進路選択に影響を及ぼすため、主要な要因の1つである（杉本，2012）。

職業決定は、Erikson, E.H. が提唱したライフサイクルの視点から人生の時期を8つの段階に分けたうちの5つ目にあたる、青年期後期の最も重要な発達課題である。Erikson, E.H. (1959) は、「自分とは何者か」「どのように生きていくのか」といった問いに対して、肯定的・確信的に回答できるようになり、社会的役割を獲得という形で統合され、アイデンティティを確立するとしている。その社会的役割の獲得において中心的位置を占めるのが職業決定である。このことから、アイデンティティの拡散は職業未決定という形で最もあらわれることが示されている。さらに、下山（1986）の研究によって職業模索・決定と青年期中期から後期の発達課題の達成度との間には正の相関があることが示されている。そのため、アイデンティティの確立は職業決定において重要であり、深い関係が存在していることが支持されている。アイデンティティの確立が青年期に達成されなければ成人

\* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

\*\* 甲南女子大学（研究実施当時）

\*\*\* 甲南女子大学

\*\*\*\* 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター

期以降の生活においても、対人不安や無気力、非行などの否定的な影響を与える。しかし、現代社会では大学卒業生における職業未決定の増大が問題視されている。この問題には、日本の教育方法が高校・大学受験に重きを置いており、受験を達成した後は進路指導には重きをおかなくなるということも関係している（本間，2011）。このような現代の背景をふまえて、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立を達成し、成人期以降の生活を充実したものにするためにも、大学生のキャリア教育は重要な役割を担っていると推測される。そのため、各大学にはキャリアセンターというキャリア教育施設が設置されており、1年生から4年生の大学の学生であれば誰でも利用できるようになってきている。本研究の研究対象とする大学でもキャリアセンターが設置されており、キャリアセンターからのお知らせが直接学生にメールで確認できるようなシステムの存在や各学科に担当者がおり、学科の専門性に考慮した対策などがある。このように、大学のキャリア教育は充実しているといえる。しかし、利用者が多いとは言えない状況である。利用者は一部の学生に限られており、施設の充実度と学生の利用率が乖離している。そのため、大学でのキャリア教育を今よりもっと有効なキャリア教育になるように検討する必要があると考えられる。

杉本（2012）の研究により、進路選択に対する意識の男女差があり、女性のほうが進路選択に対する意識尺度の得点が有意に高いことが示されている。また、進路選択を促進すると考えられる就職イメージに関しても同様の結果が見られている。さらに、黒澤（2016）の研究では、職業意識の違いによって、キャリア教育プログラムの効果には有意な差があることが示されている。これらのことをふまえると、男女で異なる意識を持っていることから、男女別でキャリア教育を行うほうがより効果的なキャリア教育となり得ると推測される。つまり、キャリア教育を行う際には男女各々の職業意識の特徴を考慮して実施するほうが良いと考える。さらに、現代の日本での雇用現場での女性

の活躍や労働力の認識・存在が高まっているが海外と比較すると女性官僚が少ないなど男女格差がまだ見られる。そのため、女性特有の職業意識を見つけ出し、これからの女性のより良い社会進出のためのキャリア教育に繋げることは重要なことであると考えられる。そこで本研究では、女子大学生を対象として、研究を進める。また、本研究では、有効なキャリア教育とは女子大学生の職業未決定を軽減することであると定義する。

下山（1986）では職業未決定尺度について男子大学生と女子大学生を含めて因子分析を行っている。また、黒澤（2016）でも職業意識尺度について、男子大学生と女子大学生を含めて因子分析を行っている。つまり、職業未決定尺度や職業意識尺度について、女子大学生のみを対象とした因子分析は行われていない。そのため、本研究では職業意識と職業未決定状態の検証的因子分析を行うことで、下山（1986）と黒澤（2016）の研究との差異から女子大学生の特有の職業意識と職業未決定状態のタイプを検討していく。

また、有効なキャリア教育のためにも、対象学生の社会で求められる能力を観点とした職業意識を理解することが重要である（黒澤，2016）ことから、本研究において職業意識とは、黒澤（2016）を参考にし、「大学生がこれから社会に出るにあたって、社会人として求められている能力とそれの習得方法についての理解の程度を示す概念」と定義する。そして、女子大学生の職業意識を調査したうえで、職業未決定者のタイプとの関連を調査する。先行研究から、職業意識と職業未決定状態の関連について、職業意識が低いと職業未決定状態も高くなると仮定する。よって、具体的にどのような職業意識を持つことが、どのような状態の職業未決定に陥るのかを検討し、両者の関連性から今よりも有効なキャリア教育について考察していく。

## 2. 目的

(1) 女子大学生の職業意識尺度と職業未決定尺度について因子分析を行い、女子大学生特有の職

業意識と職業未決定状態の因子構造を検討する。  
(2) どのような職業意識の因子がどのような職業未決定状態のタイプに影響を及ぼしているのかを検討する。

### 3. 方法

#### 3-1. 対象者と調査時期

関西圏の4年制女子大学に通う大学1年生106名が質問紙調査に参加した。最終的に、欠損値等のない女性87名(有効回答率85.29%)を分析対象にした。2019年6月10日に職業意識調査、職業未決断調査それぞれ1枚ずつの質問紙で実施した。

#### 3-2. 調査尺度

##### (1) 職業意識尺度

黒澤(2016)より、25項目を使用した。回答は、「全くそう思わない」を1点、「あまりそう思わない」を2点、「わからない」を3点、「ややそう思う」を4点、「そう思う」を5点として得点化した5件法で測定を行った。

##### (2) 職業未決定尺度

下山(1986)より、現代に合わせた言語表現、倫理的考慮をした31項目を使用した。回答は、「全くそう思わない」を1点、「あまりそう思わない」を2点、「ややそう思う」を3点、「全くそう思う」を4点として得点化した4件法で行った。なお、31項目中の1項目は逆点項目として得点化した。

#### 3-3. 倫理的配慮

質問紙の最初のページに、データは統計的な処理を行うため個人が特定されないこと、講義の成績には影響がないこと、回答を途中で止めても良いことを明記し説明した。また、研究で利用することに了解を得た。

## 4. 結果

#### 4-1. 職業意識の因子分析

まず、職業意識調査の25項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問項目で得点分

布の偏りが見られた。しかしながら、得点分布の偏りが見られた項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目についても職業意識という概念を測定する上で不可欠なものであると考えられた。そこでここでは項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

次に25項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は第1因子から順に、4.674, 2.737, 2.107, 1.756, 1.522, 1.404, 1.253…, というものであり、5因子構造が妥当であると考へた。また、一般化した最小2乗法により因子を抽出し、スクリープロット基準からも5因子構造が妥当であると判断した。そこで再度5因子構造を仮定し主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった「仕事をするのに必要な基礎的な学力は身につけている」「自分の能力に対しては自信がある」などの7項目の因子負荷量が.40未満であった。そのため、この7項目を除外した18項目で、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。因子相関を表1に示した。なお、回転前の5因子で18項目の全分散を説明する割合は53.82%であった。

第1因子は3項目で構成されており、「将来結婚したいと思う」「将来子どもを育てたいと思う」などの、将来に対するポジティブな思考の内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「明るさ」因子と命名した。

第2因子は4項目で構成されており、「言いたいことがあるときには、はっきり言うことができる」「自分から積極的に行動することができる」などの、自分の意志を持ち、進んで行動する内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「積極性」因子と命名した。

第3因子は5項目で構成されており、「筋道を立てて考えることができる」「何かをするときには、自分自身で具体的に目標を立てる」などの、将来を見据えてプランニングする内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「計画性」因子と命名した。

第4因子は3項目で構成されており、「就職や仕事に関する知識は十分ある」「コンピュータなどの情報機器を使うことは得意である」などの、就職についての情報収集の内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「基礎知識」因子と命名した。

第5因子は3項目で構成されており、「大学卒業後の就職について不安はない」「その場の感情に流されないように自分をコントロールすることができる」などの、自分自身や将来に対する不安がない内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「自信」因子と命名した。

表1 職業意識の因子間相関

	明るさ	積極性	計画性	基礎知識	自信
明るさ	-				
積極性	.23*	-			
計画性	.19	.43**	-		
基礎知識	-.01	.16	.17	-	
自信	-.09	.10	.07	-.13	-

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

#### 4-2. 職業意識の下位尺度得点

職業意識尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「明るさ」下位尺度得点 ( $M = 3.42, SD = 1.14$ ), 「積極性」下位尺度得点 ( $M = 3.02, SD = 0.86$ ), 「計画性」下位尺度得点 ( $M = 3.33, SD = 0.68$ ), 「基礎知識」下位尺度得点 ( $M = 2.26, SD = 0.70$ ), 「自信」下位尺度得点 ( $M = 2.72, SD = 0.76$ ) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「明るさ」で $\alpha = .80$ , 「積極性」で $\alpha = .72$ , 「計画性」で $\alpha = .70$ , 「基礎知識」で $\alpha = .58$ , 「自信」で $\alpha = .53$ と、「自信」に関してはやや低く十分とは言えないが、他4つに関しては許容範囲の値が得られた。

#### 4-3. 職業未決定の因子分析

次に、職業未決定尺度の31項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問項目で得点分布の偏りが見られた。しかしながら、得点分布の偏りが見られた項目の内容を吟味したところ、

いずれの質問項目についても職業意識という概念を測定する上で不可欠なものであると考えられた。そこでここでは項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

次に31項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は第1因子から順に、6.33, 3.17, 2.85, 2.10, 1.63, 1.52, 1.26…, というものであり、5因子構造が妥当であると考えた。また、一般化した最小2乗法により因子を抽出し、スクリープロット基準からも5因子構造が妥当であると判断した。そこで再度5因子構造を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった「社会の変化や景気の変動が、職業に大きな影響を与えるのではないかと不安である」「自分に合う職業を教えてくれるような検査を受けたい」などの8項目の因子負荷量が.40未満であった。そのため、この8項目を分析から除外した23項目で、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った因子相関を表2に示した。なお、回転前の5因子で23項目の全分散を説明する割合は59.47%であった。

第1因子は9項目で構成されており、「将来の職業を決めることに対して不安がある」「職業選択のための準備が十分であったかどうか不安である」などの、将来に見通しがなく職業活動に取り組めないでいる内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「レディネス不足」因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「将来、職業につかずに好きなことをしたい」「いままであまり職業のことを真剣に考えたことがない」などの、今は職業については考えたくない逃げている不安の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「現実逃避」因子と命名した。

第3因子は2項目で構成されており、「将来の職業についての希望は明確なのだが、採用試験に自信がない」「希望する職業はあるが、これが最良なのかどうか不安である」の、自分自身の関心や興味はあるがそれに向かって行動をしようとしな

い内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「自信のなさ」因子と命名した。

第4因子は4項目で構成されており、「いろいろなことに興味があるので、どの職業を選んだらいいのかわからない」「魅力ある職業がいくつもあるのでは、将来の職業を決められない」などの、職業活動に直面することで混乱している内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「優柔不断」因子と命名した。

第5因子は3項目で構成されており、「将来の職業について誰かと相談や話し合いをしたい」「自分一人で何かを決めた経験が少ないので、将来の職業について誰かと相談したい」などの、職業活動について誰かに相談したいと考える内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「サポート希求」因子と命名した。

#### 4-4. 職業未決定の下位尺度得点

職業未決定尺度の5つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「レディネス不足」下位尺度得点 ( $M = 2.84, SD = 0.61$ ), 「現実逃避」下位尺度得点 ( $M = 2.20, SD = 0.60$ ), 「自信のなさ」下位尺度得点 ( $M = 2.46, SD = 0.81$ ), 「優柔不断」( $M = 2.06, SD = 0.61$ ), 「サポート希求」( $M = 2.69,$

表2 職業未決定の因子間相関

因子	レディネス不足	現実逃避	自信のなさ	優柔不断	サポート希求
レディネス不足	-				
現実逃避	.28**	-			
自信のなさ	-.12	.11	-		
優柔不断	.15	.24*	.26**	-	
サポート希求	.17	.11	.15	-.02	-

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

$SD = 0.70$ ) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「レディネス不足」で $\alpha = .87$ , 「現実逃避」で $\alpha = .68$ , 「自信のなさ」で $\alpha = .72$ , 「優柔不断」で $\alpha = .68$ , 「サポート希求」で $\alpha = .66$ と十分な値が得られた。

#### 4-5. 両尺度の因子間相関

職業意識と職業未決定におけるペアワイズによる下位尺度間相関 ( $df = 92$ ) を表3に示す。「明るさ」と「積極性」( $r = .23, p < .05$ ), 「現実逃避」( $r = -.28, p < .01$ ) の相関, 「積極性」と「計画性」( $r = .44, p < .01$ ), 「現実逃避」( $r = -.42, p < .01$ ) の相関, 「基礎知識」と「優柔不断」( $r = .21, p < .05$ ) の相関, 「自信」と「レディネス不足」( $r = -.22, p < .05$ ), 「優柔不断」( $r = -.29, p < .01$ ) の相関, 「レディネス不足」と「現実逃避」( $r = .32, p < .01$ ) の相関, 「現実逃避」と「優柔不断」( $r = .22, p < .05$ ), 「自信のなさ」と「優柔不断」( $r = .30, p < .01$ ) の有意な相関が確認された。

#### 4-6. 重回帰分析

職業意識の各下位因子を予測変数, 職業未決定の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析を行った。表4に示す。レディネス不足では積極性と自信が有意傾向の予測力を示した ( $\beta = -.197, p < .10, R^2 = .089$ )。また, 現実逃避では明るさと積極性が有意な予測力を示した (順に,  $\beta = -.195, p < .05; \beta = -.408, p < .001, R^2 = .228$ )。また, 優柔不断では, 積極性と自身が有意な予測力を示した (順に,  $\beta = .237, p < .05; \beta = -.290, p < .01, R^2 = .154$ )。

表3 職業意識と職業未決定の下位尺度間相関 (n=94)

	明るさ	積極性	計画性	基礎知識	自信	レディネス不足	現実逃避	自信のなさ	優柔不断	サポート希求
明るさ	-									
積極性	.23*	-								
計画性	.19	.44**	-							
基礎知識	-.01	.14	.17	-						
自信	-.10	.11	.06	-.13	-					
レディネス不足	.01	-.21*	-.11	.05	-.22*	-				
現実逃避	-.28**	-.42**	-.15	.06	-.08	.32**	-			
自信のなさ	-.12	-.04	-.06	.12	-.08	-.10	.15	-		
優柔不断	.00	.17	.01	.21*	-.29**	.18	.22*	.30**	-	
サポート希求	.03	-.05	.11	.00	-.05	.12	.14	.18	.04	-

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

表4 職業意識と職業未決定の重回帰分析

予測変数 (職業意識)	目的変数 (職業未決定)				
	レディネス不足	現実逃避	自信のなさ	優柔不断	サポート希求
明るさ	.042	-.195*	-.113	-.062	.021
積極性	-.197†	-.408***	-.006	.237*	-.121
計画性	-.033	.057	-.048	-.091	.169
基礎知識	-.059	.099	.123	.152	-.016
自信	-.183†	-.050	-.068	-.290**	-.052

† $p < .10$    \* $p < .05$    \*\* $p < .01$    \*\*\* $p < .001$

## 5. 考察

### 5-1. 職業意識の因子分析

本研究では、職業意識調査と職業未決定尺度の因子分析を経て、女子大学生における職業意識と職業未決定状態との関連についての検討を行った。職業意識尺度からは「明るさ」、「積極性」、「計画性」、「基礎知識」、「自信」という先行研究とはやや異なる5因子が抽出された。まず「明るさ」は結婚や子育てなどの母性的な側面で将来へポジティブな思考を持つ傾向であると考えられる。また「積極性」は自分自身の意思を持ち、その意思を行動に表すことが可能な傾向であると考えられる。そして「計画性」は将来の目標のために、しっかりとしたプランニングをする傾向であると考えられる。「基礎知識」は就職や時事についての情報の知識、またその情報の収集方法についての基礎知識が備わっている傾向のことであると考えられる。また、「自信」は自分自身の現状や将来について、セルフコントロールについて不安を抱えていない傾向のことであると考えられる。これらの因子における質問項目は、黒澤 (2016) の「内省力」が「明るさ」と「計画性」の両因子を含んでおり、「行動力」も「明るさ」と「計画性」を含んでおり、他の3因子は一致している。因子分析の結果から同様の5因子構造が得られた。「内省力」と「行動力」が「明るさ」と「計画性」を含むのは、調査対象を女子大学生に限定したことによって結婚や子育てなど女性と強く関連する項目が影響を及ぼしたため、先行研究とは異なった結果になったのではないかと考えられる。また、 $\alpha$ 係数での内的整合性の観点からの信頼性は「自信」に

おいて十分とは言えなかったが、他の因子では十分な値が得られており、許容範囲の信頼性が確認できたといえる。

### 5-2. 職業未決定の因子分析

職業未決定尺度は「レディネス不足」、「現実逃避」、「自信のなさ」、「優柔不断」、「サポート希求」の先行研究とは異なる5因子構成であった。

まず「レディネス不足」は自己分析ができておらず、将来への見通しが不十分であるために就職活動に対して不安を抱えている傾向であると考えられる。また「現実逃避」は将来を運や偶然に任せ、就職活動に取り組みず好きなことをして就職から逃げる傾向であると考えられる。そして「自信のなさ」は将来のしたいことへの意思は持っているが、試験や決定に自信を持っていない傾向であると考えられる。また、「優柔不断」は就職活動に直面したことにより、職種の選択や周囲の反応などに不安を抱えている傾向であると考えられる。さらに「サポート希求」は就職活動に関して誰かと話し合っ進めていきたいと考える傾向であると考えられる。これらの因子における質問項目は、下山 (1986) の「混乱」が「レディネス不足」と「自信のなさ」と「優柔不断」を含んでおり、「模索」が「自信のなさ」と「優柔不断」を含んでいる。さらに、「サポート希求」は下山 (1986) では抽出されなかった因子である。因子分析の結果から同様の5因子構造が得られた。「混乱」の質問項目が本研究の3因子に含まれたのは、下山 (1986) では大学1年生から3年生を調査対象としているが、本研究では大学1年生を調査対象と

したことが影響していると考えられる。大学1年生は就職活動に関する情報が少ないため、自己分析や試験などの活動においても混乱すると予測される。また、「模索」の質問項目が本研究の2因子に含まれたのは、現代はインターネットやSNSが普及したことにより、様々な情報が溢れ、模索しやすい状況であるためだと考えられる。さらに、本研究で「サポート希求」因子が新たに抽出されたのは、調査対象者を女子大学生に限定したことにより、女性特有の職業未決定状態のタイプが抽出されたといえる。また、 $\alpha$ 係数での内的整合性の観点からの信頼性は十分に備えているといえる。

### 5-3. 因子間相関

女子大学生の有効なキャリア支援の方策を考えるためには、職業意識と職業未決定状態のタイプとの関連を見ることが重要であると考えられる。そこで、職業意識が低いと職業未決定状態が高くなることが予測される。

相関分析の結果から、「明るさ」は「現実逃避」との間に有意な負の相関があることが確認された。これは、「明るさ」と「現実逃避」に有意な関連が示されたのは、将来に対する明るく、ポジティブなイメージを想像することができないために、暗く、ネガティブな将来を想定し、将来を考えたくないと思えるためではないかと考えられる。

次に「積極性」は「レディネス不足」と「現実逃避」との間に有意な負の相関があることが確認された。「積極性」と「レディネス不足」に有意な関連が示されたのは、将来の目標に対しても自分自身の意思を持つことなく、行動を行わないと、将来への見通しや成長が不可能になることを示しているためと考えられる。また、「積極性」と「現実逃避」に有意な関連が示されたのは、自分自身の考えの発言や行動が行えないために、職業では自分自身で動いて、意思をもって活動していくことが求められるため、将来についての不安が増して、逃避するのではないかと考えられる。

「計画性」は本研究ではどの職業未決定状態と

も有意な相関が認められなかった。これは、5年後や10年後など遠い未来のキャリアへの夢や設計を立てているため、1週間後などの近い未来の計画が粗大になり、1週間後などの事柄も重要な就職活動において、長期的な生活設定を立てることは関連が薄かったと考えられる。

「基礎知識」は「優柔不断」との間に有意な負の相関があることが確認された。これは、就職活動や様々な職業に関しての情報が不十分であると、どのように就職活動を行うのが最適なのか、どのような機関を利用することが可能なのかなどの情報を得ることが不可能であるために、就職活動に関する情報量の少なさからすべての物事に不安を感じやすくなり、決定が困難になると考えられる。

「自信」は「レディネス不足」と「優柔不断」との間に有意な負の相関が認められた。「自信」と「レディネス不足」に有意な関連が示されたのは、自分自身に自信が持てないといふことをできないと思ひ込み、自分自身を俯瞰的に見ることができず、就職活動において重要な自己分析や成長が不可能になるのではないかと考えられる。また、「自信」と「優柔不断」に有意な関連が示されたのは、自分自身に自信がないということは、自身の決定にも自信が持てず、職業選択で自分自身の選択に自信が持てずに、進路決定に至らないと考えられる。

### 5-4. 重回帰分析

職業意識と職業未決定状態には因子ごとにそれぞれ特有の関連性があることが認められる。つまり、女子大学生の有効なキャリア支援の検討には、具体的に女子大学生の職業意識のどの意識にターゲットを当てキャリア教育を実施すべきなのか考える必要がある。そこで、各職業意識と職業未決定状態のタイプの因果関係を明らかにするべきであると考えられた。

重回帰分析の結果から、職業に関して明るい意識を持つと現実逃避をしにくいということが示された。これは、例えば仕事をすることで人脈が広がるやスキルアップができるなどの職業に関する

プラスな意識を持つほど、これからの自分自身のキャリアを考えることから逃げず、運や偶然に任せるのではなく行動していくと考えられるからである。さらに、就職に関して自分の意思を持ち、積極的に目標に向かって行動する意識を持つことも現実逃避をしにくいことに繋がることを示された。これは、将来就きたい職業や自分に適する業種が決定しており、企業説明会やインターンシップに積極的に参加する学生は、実際の現場や働き方への理解度が高まることから、就職活動に対する不安や注意から目を背けることが少ないのではないか。

次に、将来仕事に就くための計画を立案する計画性のある意識の所有は職業未決定状態に有意な予測力を持たないことが示された。これは、本研究での「計画性」は長期的なキャリアや生活設計における計画性であり、就職活動ではインターンシップや1次面接、2次面接などのような間近の事柄へのプランニングも重要となる。そのため、長期的な計画性はあるが、短期的な計画性が粗大になっている可能性もあることから有意な関連性が示されなかったと考えられる。

職業や就職活動に関する情報や時事、その情報の収集方法に関する基礎知識の有無は職業未決定状態に有意な予測力を持たないことが示された。これは、自己分析できることや明確な意思、自信が職業決定において重要であり、就職活動の情報を持っていても、その知識を活用することが求められるため、関連が見られなかったと考えられる。

自分自身の現状や就職活動や職業を含めた将来、セルフコントロールに関しての自信があると優柔不断になりにくいことが示された。これは、現在の生活や将来についての不安がなく、自分の行動や考えを信じるために、決断や選択が多く求められる就職活動において比較的悩むことがないと考えられる。一方、積極性が増すほど優柔不断になりやすいことが示された。これは、様々な新しいことに挑戦や経験をしていくことで、自分の将来についての様々な道を想像し、決定し難くなるからであると考えられる。また、職業に関する

自信を持つことによって職業未決定状態のタイプの1つである自信のなさとの関連が示されなかったのは、職業意識では自分自身の精神的な部分での自信の要素での自信であるが、職業未決定状態では自己分析ができてからの試験や選択への自信のなさであったためだと考えられる。

### 5-5. キャリア支援の方策

女子大学生のより良いキャリア支援には、「明るさ」、「積極性」、「自信」のこれら3つの職業意識を向上させるアプローチの実施だと推測される。まず、「明るさ」の意識を向上には、先輩や目標となる人物の紹介を行うと良いと考えられる。身近な人物が明るく仕事を行っていることを知ることやその人物のアドバイスをもらうことにより、身近であり境遇も似ているからこそ、自分と重ね合わせやすく、明るくポジティブな自分の将来を想像できると考えられる。次に「積極性」の意識を向上には、アルバイトやボランティア活動を行うことを勧めると良いと考えられる。黒澤(2013)は、アルバイト及びボランティア経験の有無によって職業未決定との間に有意な関係があることを示している。このことから、アルバイトやボランティア経験では、社会で働くことに触れ、意思を持って行動していくことを多く学べるため、積極性の向上のためのキャリア支援の1つになると考えられる。次に「自信」の意識を向上には、学生に自身を知るように勧めると良いと考えられる。現在どのような状態なのか、自分には何ができるのかなど内省を行うことで、自己分析も行いやすくなり、自身の意思や思考が分からないための自信のなさを解消することができる可能性がある。そのため、学生の良いところや傾向について伝えたり、一見就職活動に関係ない話のように感じられることであっても自分を知るきっかけになるように多くの会話を行うことがキャリア支援として有効であるだろう。

### 5-6. 今後の課題

本研究では、調査対象者が心理学科の女子大学

生であり偏ったデータになった可能性がある。そのため、学部・学科によって希望する企業や職種が異なってくることから今後はさまざまな学科から女子大学生を偏りなく募集すべきであると考えられる。また、就職活動のツールはほぼ対面で行われていたが、新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインを通じた就活が広く活用されるようになった（堀，2021）。さらに、産業間の雇用格差が生じており、格差は学部・学科に現れるだけでなく、特に女性が職を得やすい産業の雇用が悪化し、大卒女性が脆弱な状況に置かれやすくなっている（堀，2021）。このことから、本研究は新型コロナウイルス感染拡大前の調査であり、社会情勢や会社の状況に不安を抱える学生が現在よりも少なかった可能性がある。そのため、現代の女子大学生のキャリア教育を行っていくには、新型コロナウイルス感染拡大の社会情勢などの影響も視野に入れた教育を行っていくべきではないかと考えられる。

さらに、本研究は大学1年生を対象とした研究であった。そのため、就職活動に直面する大学3・4年生の職業意識との変化を調査する必要があると考えられる。職業意識の変化を調査することで、大学1年生で向上させておくべき職業意識の検討がより明確になると考えられる。大学1年生からキャリア支援を積極的に行うことが3・4年生の就職活動の取り組みや職業未決定状態にどのような影響を与えるのかなど、キャリア教育の重要性についても検討すべきだろう。

## 付 記

本研究は筆者が2022年に甲南女子大学人間科学部に提出した卒業論文について、筆者らが加筆修正を行ったものである。

## 謝 辞

ご多忙の折、本研究にご協力いただきました甲南女子大学の大学生の皆様へ深く感謝の意を表します。

## 引用文献

- 安達智子（2008）女子学生のキャリア意識—就業動機，キャリア探索との関連— 心理学研究, 79(1), 27-34.
- 本間啓二（2011）第33回研究大会報告—2011年（平成23年）11月12日（土）・13日（日）キャリア教育研究, 30(2), 74-85.
- 堀有宇喜衣（2021）コロナ感染拡大が新規大卒就職に与えた影響 日本労働研究雑誌, 729, 74-78.
- 黒澤良輔（2013）大学生のボランティア経験等と職業態度 キヤリア教育学会2013年大会発表抄録表.
- 黒澤良輔（2016）大学生に対するキャリア教育の試みについて 徳島文理大学研究紀要, 91, 45-51.
- 下山晴彦（1986）大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34(1), 20-30.
- 杉本英晴（2012）大学生の就職に対するイメージの構造 キヤリア教育研究, 31(1), 15-25.
- 高橋美保（2005）「働くこと」の意識についての研究の流れと今後の展望—日本人の職業観を求めて— 東京大学大学院教育研究科紀要, 45, 149-157.
- Erikson, E. H. (1959) Identity and the life cycle. Psychological issues, 1(1), New York : W. W. Norton.

## **The Relationship between Attitudes toward Vocation and Vocational Indecisions among Female College Students.**

Marie IMOTO \*, Ryosuke KUROSAWA\*\*, Takatoshi HOSHINO\*\*\*, Hiroyuki IKEDA\*\*\*\*

\* Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

\*\* Former Konan Women's University

\*\*\* Konan Women's University

\*\*\*\* Center for Development and Clinical Psychology, Hyogo University of Teacher Education

In this study, we examined the relationship between the attitude toward vocation and vocational indecisions among 106 first- year female university students using items from the Attitude toward Vocation Scale and the Vocational Indecision Scale. Factor analysis of both scales revealed that the same five factors were extracted from the Attitude toward Vocation Scale while the "support seeking factor" was extracted from the Vocational Indecision Scale, which was different from the previous study. This result suggests that there is a vocational indecision unique to female university students. In addition, multiple regression analysis using each of the subfactors of the Attitude toward Vocation Scale as predictor variables, and each of the subscales of vocational indecision as objective variables revealed the followings significant predictive power: Proactivity and basic knowledge are associated with lack of readiness; Brightness and basic knowledge are associated with escaping reality; Proactivity and self-confidence in indecision. This suggests that improves female college students' proactivity and self-confidence will be an effective career support.

Key Words : Attitude toward Vocation, Vocational Indecision, Career Support